

小学校低学年の部

特選 課題図書部門

「いのち」をいただくということ

大野町立東小学校二年

おか田 はやと

ぼくは、おすしが大好きだ。「おすしやさんにいらっしやい！」の本は、中を見たらしゃんがいっぱい、これなら、長い文がにが手なぼくでも読めると思った。そんなりゆうでえらんだけれど、ぼくはこの本をよんで、たくさん考えることができた。

この本の中には、キンメダイ、アナゴ、イカの三びきが出てきて、はじめて知ったことがいっぱいだった。どれも、生きるためのくふうがいっぱいでおもしろいなと思った。でも、びっくりしてしまったこともある。それは、たべるすがたになるまでに、めうちでうごかないようにしてさばかれていますということや、イカが、目と目のあいだをブスツとさしたら、まっ白にかわったことだ。それを見て、ぼくはかわいそうだと思い、お母さんに、

「魚、たべんほうがいいかな。」

と聞いた。そうしたら、お母さんは、

「どう思う？」

と言った。

だからぼくは考えた。魚をたべなくても肉がある。でも気づい

た。肉も同じで、ぶたやにわとりがさばかれています。魚も肉も、もともと生きているものだ。いのちだ。大切ないのちだ。でもやつぱりぼくはたべたい。

こんな気もちをはじめで、お母さんに言うと、

「それは、いのちをいただいている、ということに気づいたからだね。ありがとうの気もちでたべて、元気に生きようね。」

と言った。

ぼくは、生きているものがどうやってたべるものにかわるのを知って、「いのち」をいただいているとかんじることができた。たくさんの「いのち」がぼくやかぞくの「いのちのもと」になる。さいごのページの女の子が、どうして目をつぶってごちそうさまと言ったのか、ぼくもすこしわかった気がする。

作者名 おかだだいすけ 作

『おすしやさんにいらっしやい！生きものが食べものになるまで』
岩崎書店

【講評】

はやとさんは、この本をきっかけに、「いのち」について、いっしょうけんめい考えましたね。自分なりのけつろんを見つけたようすが、お母さんとかいわをとおしてつたわってくるすてきな作文です。